

氏名	近 藤 昭
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 1299 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和57年 6 月30日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第 5 条第 2 項該当）
学 位 論 文 題 目	サルコイドーシスに関する研究 第 1 編 臨床集計と血清 Angiotensin-converting enzyme 活性の検討 第 2 編 末梢血単球機能の検討
論 文 審 査 委 員	教授 太田善介 教授 長島秀夫 教授 粟井通泰

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

サルコイドーシス患者における臨床的集計と血清 Angiotensin-converting enzyme (ACE) 活性を検討した。本症の組織診断において前斜角筋リンパ節生検は 75 % の陽性率がえられ、Kveim 反応に比してより有用な方法であった。血清 ACE 活性はサルコイドーシス特に活動型において著明に上昇しており、副腎皮質ホルモン投与による病状の改善とともに正常化する事より、本症の診断及び治療経過の追跡に有用である。

次にサルコイドーシス患者 13 例の末梢血単球機能（単球数、 β -galactosidase 活性、走性、貪食能、腫瘍細胞傷害作用）を検討した。単球実数と β -galactosidase 活性は健常人と比較して有意の差は認められなかった。血清 ACE 活性の亢進症例では β -galactosidase 活性の亢進がみられた。単球走性および貪食能は健常人のそれに比して著明に低下していた。腫瘍細胞傷害作用は 2 種類の標的細胞のいずれに対しても健常人との間に差は認められなかった。以上の単球機能異常が、本症におけるツ反応陰性などの細胞性免疫反応の低下、あるいは肉芽腫形成に関与していることが窺われる。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究はサルコイドーシスに関して臨床的ならびに本疾患の末梢血単球機能について研究を行ったものであるが、従来充分明らかでなかった血清 Angiotensin-

converting enzymeの臨床的意義ならびに単球の機能低下を明確に証明し，価値ある業績であると認める。

よって，本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。